第６回第２期陸前高田市まち・ひと・しごと総合戦略策定会議（令和５年１２月２２日開催）における効果検証

※　委員から意見のあった項目のみ記載

■陸前高田市第２期まち・ひと・しごと総合戦略対象事業　実施状況

基本目標	基本施策	具体的な施策	事業名	事業内容	令和４年度実績	委員からの意見
１　陸前高田への新たな人の流れを創造し、「しみん」が集うまちをつくる	①「陸前高田思民」の拡大と市民総活躍の環境づくり	交流人口の拡大及び関係人口の創出	思民交流事業	・本市に関心と愛着を持ち、何度も繰り返し訪問され、市民交流を続けている方々や、ふるさと納税に協力をいただいた人など、本市に関わりを持ち続けている方々を対象として、「思民」の会員募集や情報発信を行い、本市との新たな人の流れを創造する。	・新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、思民交流会の開催を数年見合わせていることから、制度設計の再検討を行った。	・思民制度に関しては、ふるさと納税者を対象にした新たな制度の検討等も含め、今後の展開を期待したい。
		道の駅を拠点とした観光客の市内周遊の促進	観光客市内周遊促進事業	・本市の特産品、食、体験を、道の駅を拠点として提供、情報発信することで、本市ファンの創出、道の駅来場者の拡大を図る。 ・産学官民が連携し、地域資源を観光コンテンツ化し道の駅を拠点として提供することで、観光客の市内周遊を誘導し促進する。 ・道の駅を拠点とした観光施策により、市内経済の循環を推進する。	・令和4年度道の駅来客数　605,100人 ・観光周遊パスポート「高田旅パス」の実施　市内加盟店舗数87店、パスポート発給数9,592枚 ・グリーンスローモビリティ（モビタ）による道の駅を拠点とした市内周遊事業を開始　乗車人数4,156人	・新たにオープンしたキャンプ場や道の駅には多くの利用者がいると思うが、この方々に市街地に足を運んでもらうための手段や施策が重要。
２　若者や女性が活躍できるしごとの創出につなげ、これを支える人材を育て活かす	① 陸前高田まるごとブランド化戦略	地域の特性を活かしたブランド化推進	地域ブランド化推進事業 たかたのゆめ普及促進事業 ふるさと納税活用事業	【地場産品の販路拡大】 ・地場産品を市外へＰＲし、販路拡大と認知度向上を進める。	・ふるさと納税の返礼品でＰＲを行い、交流がある川崎フロンターレのイベントなどへ参加し、認知度向上に向けた取り組みを実施した。	・新規の事業者のみならず、既存の事業者に踏ん張っていただくための施策を講じてほしい。 ・商圏や販路を拡大するチャレンジを応援できるような施策があると良い。
		新たな観光資源の活用と既存観光資源の磨き上げ	観光資源開発・磨き上げ事業	・新たな観光資源開発を促進し、市内事業者と連携しながら当該観光素材の磨き上げを図る。 ・既存観光資源の再発掘による磨き上げを促進し、新たな観光素材との連携による交流人口の拡大を図る。	・道の駅来客数　605,100人 ・東日本大震災津波伝承館　207,009人 ・三陸花火大会来場者数　約5,800人 ・三陸花火競技大会来場者数　約12,000人 ・海水浴利用客数　7,442人 ・観光ガイド事業　1,939人 ・パークガイド事業　10,008人	・観光客入込数については、高田旅パスの利用者数を使うと観光客の行動等も含めて、より詳細な実態を把握できると思う。
３　結婚・出産の希望をかなえ、子育てを協働で支える環境と、誰もが活躍できる地域社会をつくる	③ 誰もが活躍できる地域社会をつくる	共生・協働のまちづくりの推進	協働のまちづくりの推進事業	・市・コミュニティ推進協議会・各種地域団体・まちづくり団体による分野別意見交換会などの開催や協働によるまちづくりの推進体制を構築する。	・市職員を対象に協働のまちづくりに関する研修会を3回開催した。 R4.10.25（火）　17名 R4.11.15（火）　18名 R4.12.20（火）　16名 計　51名	・高齢者から子どもまでお金の勉強ができる機会があると良い。
４　市民の安心につながる暮らしやすいまちをつくり、地域と地域を連携する	② 地域と地域を連携する	大規模災害を想定した、相互連携訓練の実施	災害協定民間団体企業等連携訓練実施事業	・東日本大震災レベルの災害を想定し、連携訓練を行う。	・岩手県総合防災訓練について、岩手県、気仙２市１町、関係機関が連携のもと、R4.10.29日（土)に実施した。当訓練のなかで、市では、市内全域で緊急地震速報訓練（地震の揺れから身を守る行動）、沿岸地域で、津波避難訓練を実施した。また、総合防災訓練では、コミュニティホールを主会場として、避難所開設・運営訓練、医療サービス提供訓練、緊急物資受入・輸送訓練、防災資機材の展示等を実施した。	・災害時に避難することが想定される方々と、受け入れる高台の方々が一堂に顔を合わせる機会があると良い。 ・避難する人数や、集まった方々の顔や名前が分かるような仕組みづくりが必要。